世界かんがい施設遺産に
拾ケ堰が登録

安曇野の農業を支える農業用水「堰」。そのうちの一つ「拾ケ堰」が先人の偉業と、地域の皆さんの長年にわたる維持管理が認められ、滝之湯堰・大河原堰（茅野市）と共に県内で初めて世界かんがい施設遺産に登録されました。

拾ケ堰と常念岳（三郷明盛）

市の中央を東西に流れる拾ケ堰（管理者・長野県拾ケ堰土地改良区）が、11月8日、「国際かんがい排水委員会（ＩＣＩＤ）」（本部・インド・ニューデリー）から「世界かんがい施設遺産」に登録されました。

世界かんがい施設遺産は、かんがいの歴史・発展を明らかにし、理解を深めるとともに、施設の適正な保全を図っている歴史的なかんがい施設を認定・登録する制度です。建設から１００年以上が経過し、かんがい農業の発展に貢献し、技術的にも優れた水路やため池などの施設が対象です。

本年度登録された施設を合わせて、現在、世界で50施設（うち日本国内27施設）が登録されています。県内では、滝之湯堰・大河原堰（茅野市）と共に拾ケ堰が初めて登録されました。

拾ケ堰の延長は、約15キロメートル、幅は約10メートルで、松本市島内の取り入れ口から市内穂高の烏川に至る、ほぼ標高５７０メートルの等高線に沿って流れています。今から２００年前、江戸時代の１８１６年２月に周辺の10カ村の人々延べ６万７０００人の手により、鍬・つるはしなどを使って開削。勾配が1キロメートル進んで30センチメートル余り下がるというゆるやかな高低差で流れる堰を、わずか3カ月という驚異的な速さで完成させました。市内では豊科、堀金、穂高地区の約８００ヘクタールの水田を潤し、県下有数の米どころ安曇野を支える用水路の一つです。

また、平成18年には、農林水産省の「疏水百選」にも選定され、おり、堰と屋敷林に包まれた土蔵や民家が点在する田園、背景に雪を頂く北アルプスの山々が織りなす風景は、安曇野ならではの風景の一つになっています。

■高い測量技術と住民の力で完成した拾ケ堰

当時の測量（上）、人力による工事（左）の想像図
長野県拾ケ堰土地改良区提供

安曇野は昔から、肥沃な土壌にもかかわらず水がなかったため、年貢米はもとより自分たちで食べる米にも苦労した土地でした。この農業用水の問題を解決するため、住民たちの手で開削したのが拾ケ堰です。

事前に綿密な測量と設計がされ、当時、木製の計測器を使い15キロメートルの長さを18日間で測量したという記録があります。工事は、278に分けられた工区で行い、鍬、じょれん、もっこ、むしろを使って人の力で完成しました。完成により300ヘクタールの水田が開かれました。

報告をする中島理事長（中央）

世界かんがい施設遺産に選定された翌日の11月9日、長野県拾ケ堰土地改良区の中島義朋理事長が市役所を訪れ、宮澤市長に報告しました。中島理事長は「水を求めて3カ月で完成させた先人の苦労や歴史を世界中の人や安曇野の子どもたちに知ってほしい。これからも堰を守っていきたい」と話しました。

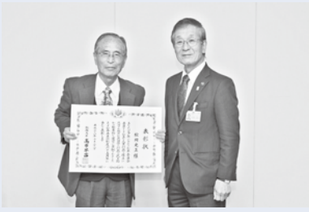
■消防団協力事業所・県知事表彰

本年度、県の消防団協力事業所知事表彰（12事業所受賞）に、市内から中井自動車（株）（中井善夫代表取締役・明科中川手）が選ばれました。

11月11日に県松本地方事務所の松沢宏明副所長と鳥羽昌弘市消防団長が同社を訪れ、表彰状などを贈りました。同社では、平成20年に市の制度が始まる前から消防団員を雇用し、長年にわたり社を挙げて団員の活動を支えていることや、社内にAEDを設置するなど地域防災に積極的に取り組んでいることが評価されました。現在、市の消防団協力事業所には52社（11月末現在）が登録しています。制度の詳細は危機管理課へ問い合わせください。

問危機管理課（TEL72・6769　FAX72・6739）

■元公平委員長・総務大臣表彰



宮澤市長に受賞報告した松岡さん（左）

「公平委員会制度65周年記念総務大臣表彰」を受賞した松岡光正さん（三郷温）が11月4日、宮澤市長に受賞報告しました。松岡さんは、平成14年8月から24年12月まで南安行政事務組合と市の委員を10年以上務め、21年から3年間は、委員長に就きました。市では初の受賞です。公平委員会は、市職員などの利益保護や人事権の公正な行使を保証するため設置されています。